

鈴木信太郎記念館だより

第9号

鈴木信太郎記念館開館5周年記念展示関連事業

対談「山内義雄 × ポール・クローデル」

2018年3月に開館した当館では5周年を記念して、現在、鈴木信太郎をはじめ彼と親交のあったフランス文学者5人を紹介する企画展示「5 cinq ~5人のフランス文学者たち~」を開催中です(2024年4月28日迄)。そのうちのひとり、山内義雄(1894-1973)は、駐日フランス大使だった詩人ポール・クローデル(1868-1955)の文学活動を支え、クローデルの詩集『四風帖』(1925年)や『百扇帖』(1927年)等の日本における刊行に尽力しました。また、『四風帖』の刊行にあたり、親交のあった信太郎と堀口大學、西條八十を誘って四季をテーマとした四篇の詩の分担訳を計画しています。

本対談では、山内のご令孫にあたる山本泰朗氏とクローデルの専門家である大出敦氏のお二人に、山内義雄とクローデルの交流を中心にお話いただきました。途中では、山内が紹介した日本画家・富田溪仙(1879-1936)とクローデルが共作した最初の作品『聖女ジュヌヴィエーヴ』(1923年)の現物をお見せいただくプレゼントも。会場を湧かせました。「大出氏のわかりやすいお話と、山本氏の生き活きとした血のつながった方にしか語れない思い出話の二重の面白さ。とても贅沢な、貴重なお時間でした。」とのお声をいただきました。

展示では、クローデル自筆の短詩が入った信太郎宛て扇面をはじめ、『四風帖』ゆかりの品もご紹介しています。こちらも併せてご覧ください。

(永嶋 里佳)

[日 時] 2023年8月19日(土) 14:00~15:30

[講 師] 山本 泰朗 氏(山内義雄ご令孫)、大出 敦 氏(慶應義塾大学教授)

[参加者] 38名 [会場] 南大塚地域文化創造館

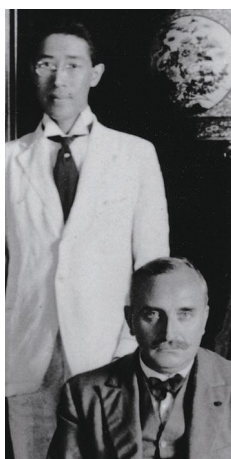


図1 山内義雄(左)と
ポール・クローデル(右)
(写真提供:山本泰朗氏)



図2 対談の様子(左)大出敦氏(右)山本泰朗氏



図3 ポール・クローデルから鈴木信太郎宛て扇面
(『四風帖』特別刷り/富田溪仙画)、1926(大正15)
年頃、当館蔵

学生時代の小林秀雄

— 『類推の魔』の思ひ出 —

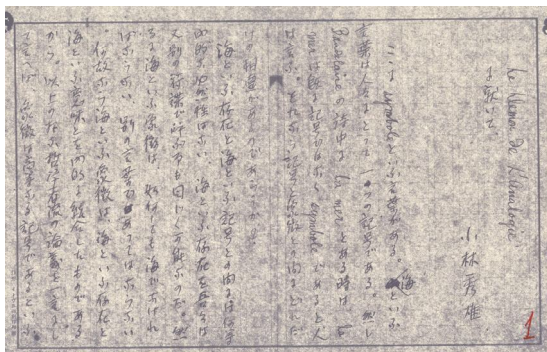
開館5周年記念展示「5 ^{サンク} cinq ~5人のフランス文学者たち~」では、鈴木信太郎と前頁で紹介した山内義雄に加え、東大仏文科初の日本人教授として、信太郎らとともに日本のフランス文学研究の礎^{いしすえ}を築いた辰野隆^{ゆたか} (1888-1964)、信太郎と大学の同級で近代演劇界に大きな足跡を残した岸田國士^{くにお} (1890-1954)、辰野や信太郎の教え子で評論家の小林秀雄 (1902-1983)の5人を取り上げています。本稿では、今年没後40年を迎える小林秀雄の学生時代についてご紹介します。

小林秀雄は、1925(大正14)年4月、東京帝国大学文学部佛蘭西文学科に入学します。詩人の三好達治、小説家の今日出海^{こんひでみ}、フランス文学者の中島健蔵らは同級生でした。しかし、高校に入学する直前に父を失った小林は、家計を支えるために講義にほとんど出席せず、家庭教師(大岡昇平は教え子の一人)や翻訳のアルバイトに明け暮れる日々を送ります。しかし、「あんなに本を読んだ時代はない。」と自身が後に語るように、辰野宅に通い本を借りるように読んでいたといえます。

小林の入学当初、信太郎はフランス留学中で不在のうえ、翌1926(大正15)年の帰国後に再開した授業にも、小林は欠席続きだったため、在学中に二人が顔を合わせる機会は稀でした。それでも小林秀雄を秀才揃いの東大仏文科の中でも「第一の秀才」と評した信太郎は、彼がマラルメの散文詩「類推の魔」^{るいすい}について書いた試験レポートについて、以下のように語ります。

(前略)これらの人たちの中で、私が第一に敬服してゐるのは小林秀雄で、それには十分な理由がある。私は長年マラルメといふ世界の詩の方向を變へたやうな大詩人について研究して、この詩人については、まあ、大體を知つてゐるが、今から四十年前はフランスでも研究書はチボーデ以外に一、二しかなかつた。勿論、他の諸國にもない。私は小林君たちの頃、マラルメの散文詩を演習に使つてゐて、その試験には「マラルメ、類推の魔について」といふ問題を出して、最も難解な散文詩の解明を要求した。それに對する小林君の解答は實に素晴らしかつた。私の教師生活の間でこれほどの答案に接したことは二度となく、且それ以降發展したフランス及び英米の研究に於いても、この散文詩の結びの節の解釋について、これほど鋭いものはない。あまりにも見事なので、私はこの原稿用紙十枚の答案を今でも保存してゐるが、今日それを取り出して讀んでも、私には新鮮である。その一部分は小林君の著書昭和六年刊『文藝評論』の中の「様々なる意匠」と題した有名な作品に吸収されて、多くの青年たちに深い影響を與へたが、結びの節の解釋はまだ發表されてはゐない。それはベルグソンの記憶の「誤つた認識」といふ現象を、マラルメの結論に應用したものであつた。世界大戰後に知つたことだが、二十世紀の叡智と見做されたポール・ヴァレリーの若い時、陸軍省に入る試験で落された答案が、ドイツの勃興を恐れ、日本の勃興を預言する『方法的制覇』といふ鋭い著書の骨組となつた。小林君の答案も鋭さが似てゐるやうに思はれる。

(「佛文畏友」)



今回初公開となる学生時代の小林秀雄の試験レポート(青焼き)は、本来は試験の後に焼却される運命にありました。しかし、その煌めきゆえに一教師たる信太郎によって密やかに保管され、さらにその書齋の一隅で1945(昭和20)年の城北大空襲をも耐え抜き、火の鳥のごとくよみがえったものなのです。

(永嶋 里佳)

図 学生時代の小林秀雄の試験レポート(青焼き)
1927(昭和2)~1928(同3)年頃、当館像

【参考文献】鈴木信太郎『「類推の魔」の思ひ出』、「佛文畏友」、「教師冥利」、いずれも『鈴木信太郎全集』第5巻所収、大修館書店、1973年

戦災をくぐり抜けた書庫・書斎(書斎棟)

東京城北部一帯が襲われ、豊島区にも甚大な被害をもたらした城北大空襲は、1945(昭和20)年4月13日夜から翌14日未明にかけてのこと。鈴木家は焼夷弾を直接受けなかったものの、三方から迫りくる火災で周辺は火の海になり信太郎夫妻と子供たちは火の粉が降りしきる中、少し離れた坂の上に避難します。木造二階建ての母屋が炎に包まれ焼け落ちる様子を、涙を流しながら見続けた信太郎ですが、猛火に煽られながらも鉄筋コンクリート造の書庫・書斎だけが焼け残った時のことを「人世は何が僥倖になるか解らない。船火事から生れた書庫のお陰で、大戦争の爆弾が降るやうになつてからも、どうせ死ぬなら本と一緒に書庫の中で死んじまへと思つて、防空壕も掘らずに居たところ、矢張り爆弾の火事で家はすつかり焼かれてしまつたが、書庫だけは水一滴も掛け得なかつたのに、辛じて焼け残つてくれた」²と、随筆に書き記しています。

この書庫・書斎は奥に二階建ての蔵のある設計で、当時の個人宅としては珍しい鉄筋コンクリート造の耐火構造建築物です。1925(大正14)年に渡仏した信太郎が翌年父危篤の知らせを受け急遽帰国した際に、収集した稀観本約1,000冊を船火事で失った苦い経験から、二度と本を焼失させないという信念を貫き、1928(昭和3)年に竣工しました。

日本の伝統的な防火建築として土蔵造りがありますが、江戸時代に入ると漆喰仕上げの手法が普及し、耐火性がより高くなりました。さらに、1872(明治5)年の銀座の大火をきっかけに、明治新政府は東京市中を耐火構造の煉瓦建築に改造することを計画します。この不燃化都市構想は財政難によって頓挫しますが、1877(明治10)年に完成した銀座の煉瓦街は、建築の近代化を象徴する存在となりました。しかし、1923(大正12)年9月1日の関東大震災で多くの土蔵が焼け落ち、銀座の煉瓦街も壊滅します。

日本で鉄筋コンクリート造技術が紹介されたのは、明治20年代後半ですが、震災後の復興事業では、多くの集合住宅で耐火・耐震の鉄筋コンクリート構造が採用され日本の住宅建築における大きな節目となりました。材料であるセメントは1875(明治8)年に国内での生産が成功しており、1883(明治16)年以降、次々と民間のセメント製造会社が設立されていたことから、需要に応える環境はすでに整っていたのです。

船火事や震災を経験した信太郎が、鉄筋コンクリート造の書庫・書斎建築を計画した際、その分野に精通していた建築家の大塚康に設計を依頼します。「鈴木邸増築工事仕様書」(1927)によると「鋼鉄製サッシュ、シャッター等ハ図面ニヨリ製作取付クベシ」、「庫及書斎北側防火扉ハ図面ニヨリ鋼鉄板製石綿入トシ入念製作火ノ侵入ナキ様取付クベシ」、「書斎入口防火扉モ前同断入念製作シ出火ノ際充分効力ヲ發揮スル様取付クベシ」など、施主の強い意向を反映して建築されたことがわかります。大塚による堅牢な設計と施工を請け負った荒井組の技術の高さもさることながら、煙突や細かい空気穴を徹底的に塞いでいくことによって、内部は焼け焦げることも無く、本も全て無事でした。米穀問屋に育った信太郎にとって、それは有事に備える知恵³であったのです。猛火を耐え抜き戦災をくぐり抜け、地域の歴史や文化を物語る貴重な遺産として95年の時を刻み続けています。



現在の書斎棟外観(2023年8月撮影)

(徳力 まもり)

【註】1. 現在の書斎棟二階は1956年の再建。1931年に増築した二階は戦災で焼け落ちている。

2. 鈴木信太郎『稀観本』、『鈴木信太郎全集』第5巻、大修館書店、1973年、p.340

3. 土蔵にできた鼠穴などの隙間を埋める商家の防火対策。

【参考文献】鈴木道彦『フランス文学者の誕生』筑摩書房、2014年/「鈴木信太郎と旧鈴木家住宅の思い出」鈴木道彦氏(信太郎次男)へのインタビュー映像を参照

記念館からのお知らせ

開館5周年記念展示ギャラリートーク

開館5周年記念展示「5 cinq ~5人のフランス文学者たち~」の担当学芸員によるギャラリートークを行います(全5回)。各回5人のうちのひとりを取り上げ、展示とともにご紹介します。

[日時・内容] ①2023年9月16日(土):辰野隆 ②10月21日(土):岸田國士 ③11月18日(土):山内義雄
④2024年1月20日(土):小林秀雄 ⑤3月16日(土):鈴木信太郎 (全5回)
各回14:00~(30~40分程度)

[申し込み] 事前申し込みは不要です。当日直接会場にお越しください。

ギャラリートーク

鈴木信太郎記念館の建物を中心として、当館学芸員がみどころを分かりやすく解説します。事前申し込みは不要ですので、お気軽にご参加ください。

[日 時] 2023年12月16日(土)、2024年2月17日(土)
各回14:00~(30~40分程度)

メールマガジン「鈴木信太郎記念館ニュース」のご案内

当館の最新情報をお伝えするメールマガジン「鈴木信太郎記念館ニュース」を配信しています。講演会やイベント情報、展示のご案内や休館情報などを不定期配信でお知らせしています。配信をご希望の方は、当館ホームページよりご登録ください。



座敷棟にて 初夏の庭を縁側から望む



茶の間にて くつろぐ信太郎(パネル)

鈴木信太郎記念館だより 第9号

発行日 2023年9月27日

発行 豊島区

編集 豊島区立鈴木信太郎記念館

〒170-0013 東京都豊島区東池袋5-52-3

TEL: 03-5950-1737

<https://www.city.toshima.lg.jp/129/bunka/bunka/shiryokan/suzuki/suzuki.html>

